

コリャーク語チャウチュヴァン方言における3系列の母音調和*

呉 人 恵

Vowel Harmony of the Chawchuvan Dialect in Koryak
with the Three Harmonic Series

KUREBITO, Megumi

This paper aims to describe vowel harmony in the Chawchuvan dialect of Koryak in morphophonological terms. Koryak and Chukchi, which belong to the Chukchi-Kamchatkan language family, are known to have asymmetrical vowel harmony, with vowels classified into two series: dominant and recessive. The vowel harmony rule states that if any morpheme in a word has a dominant vowel, then all recessive vowels in other morphemes are assimilated, such that they become dominant. In contrast, if there is no morpheme containing a dominant vowel, then all vowels in the word remain recessive.

However, the Chawchuvan dialect in Koryak has a number of phenomena that deviate from the vowel harmony rule. These phenomena are mainly due to the correspondence of /a/ (that is dominant in Chukchi) to the recessive /e/ (e.g. 【Chaw】kali - 【Chuk】keli ‘write’, 【Chaw】ala - 【Chuk】ele ‘summer’). Muravyova (1980) notes that, unlike Chukchi, the Chawchuvan dialect should be regarded as having three harmonic series, I, I’, and II. Muravyova (1980) also regularizes the behavior of the three series from a morphophonemic point of view, which is notable progress in terms of describing the vowel harmony in Chawchuvan.

However, Muravyova’s (1980) work still has several problems that need to be reexamined. The main problem is that it is not clear in the description whether it regards vowel harmony as a vocalic phenomenon or a morphological phenomenon. Concretely, it assigns a series for both vowels and morphemes,

Keywords: Koryak, the Chawchuvan dialect, asymmetric vowel harmony, underlying four vowel morphophonemes, hierarchical three harmonic series

キーワード: コリャーク語, チャウチュヴァン方言, 非相称的母音調和, 基底の4母音形態音素, 3系列の階層

* 本稿は、科学研究費基盤研究 (B)「北方危機諸言語の形成プロセスの解明に向けたネットワーク強化」(18H00665, 代表: 呉人恵) の研究成果のひとつである。聞き取り調査では、主に Ajatginina Tat’jana Nikolaevna (1955年, マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第5トナカイ遊牧ブリガード生まれ, 女性) にコンサルタントとして協力していただいた。ここに記して謝意を表したい。本稿の執筆にあたっては、お二人の査読者の方、ならびに安藤智子氏 (富山大学人文学部) からの的確かつ貴重な助言をいただいた。心から謝意を表したい。ただし、本稿における誤りは、筆者自身の責任に帰するものである。



which is redundant and causes inconsistency between the description of the morphemes with vowels and consonants, and those with only consonants.

The present paper aims to refine Muravyova's (1980) description. First, it argues that vowel harmony is a phenomenon on the morphological level rather than the vocalic level, by pointing out that the Russian loanwords consistently behave as belonging to series II, regardless of the vowels they contain, and that even the morphemes with only consonants involve vowel harmony. Second, it proposes a revised characterization of vowel harmony in the Chawchuvan dialect as follows:

- (A) All the morphemes in Chawchuvan are divided into three harmonic series, I, I', and II in the underlying morphophonemic representation.
- (B) The three series are hierarchized as $I < I' < II$, in which II can assimilate both I and I', and I' can assimilate only I.
- (C) The vowel morphophonemes are {I}, {A}, {U}, and {E}. They are realized as /i/, /e/, /u/, /o/, /ə/ on the surface phonemic representation.

Clarification of the historical relationship between the two-series vowel harmony (a) and the three-series vowel harmony (b) remains open for future study.

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. はじめに | 3.1. I' 形態素 |
| 2. 母音か形態素か? | 3.2. 同系列の形態素同士 |
| 2.1. Muravyova (1980) | 3.3. II 形態素+I, I' 形態素 |
| 2.2. 問題点と修正案 | 3.4. I' 形態素+I 形態素 |
| 3. 3系列の母音調和 | 4. おわりに |

1. はじめに

本稿では、シベリア北東端に分布するチュクチ・カムチャツカ語族のひとつ、コリャーク語チャウチュヴァン (Chawchuvan) 方言¹⁾の母音調和について考察する。その目的は、一般規則からは逸脱する²⁾と考えられている現象も含めて規則化した Muravyova (1980) を検証し、修正案を提案したうえで、3系列の母音調和として新たに記述しなおすことである。

-
- 1) チャウチュヴァン方言の音素目録は以下のとおり。/p, t, t', k, q, v, ʎ, ʑ, c, m, n, n', ŋ, l, l', j, w, i, e, a, o, u, ə/。できるかぎり音価に近い音素記号を用いているが、若干の記号については次のとおり説明を加える。/t', n', l'/の「'」は口蓋化を示す。/c/ は [tʃ], /j/ は音節初頭で [j], 音節末で [j], /w/ は音節初頭で [w] (軟口蓋化が強い [wʲ] で聞こえる場合もあり), 語末を除く音節末で [w], 語末で無声化した [w̥] となる。
 - 2) 本稿では、コリャーク語の母音調和が同系のチュクチ語に見られる母音調和とは異なるという意味で便宜的に「逸脱」という語を用いている。これまで先行研究で言われてきたチュクチ語のような規則的な母音調和から不規則な母音調和への歴史的变化の可能性を念頭に置いたものではない。

コリャーク語は、舌の高低³⁾を弁別特徴とする弱母音 (recessive) と強母音 (dominant) による非相称的母音調和 (asymmetric vowel harmony) を持つ言語として知られてきた (Aoki 1968)。この母音調和では、1語の中に弱母音と強母音が共起することは許されず、弱母音は強母音を含む形態素と結合すると、対応する強母音に転換するとされる (Kenstowicz 1979)。「弱母音」「強母音」と呼ばれるのは、このように後者が前者に対して支配的であることによる。また、強母音を含みさえすれば、語幹が弱の接辞を強に転換させるだけでなく、強の接辞が弱の語幹を強に転換させることもあるため、「双方向的な (bidirectional)」母音調和ともされている (Kenstowicz 1979: 402)。いわゆるウラル・アルタイ型の母音調和とは性質を異にする所以である。

ところで、コリャーク語に見られる母音調和は、チュクチ・カムチャツカ語族を構成する言語、すなわち、チュクチ語 (Chukchi)、ケレク語 (Kerek)、コリャーク語 (Koryak)、アリュートル語 (Alutor)⁴⁾、イテリメン語 (Itelmen) で同じように保持されているわけではない。この語族における母音調和について、これまで大きく次の3点が指摘されている (Stebnitskij 1937, Skorik 1979, Fortescue 2005)。

- 1) チュクチ語は弱母音・強母音の2系列に分かれた規則的で安定した母音調和を示す。
- 2) ケレク語、アリュートル語、イテリメン語の母音調和は大きく崩れている。
- 3) コリャーク語には、母音調和に関してチュクチ語に近い特徴を示す方言 (パラナ方言、カラガ方言)、ケレク語に近い特徴を示す方言 (アプカ方言、カメン方言)、その中間的な特徴を示す方言 (チャウチュヴァン方言) がある (地図1参照)。

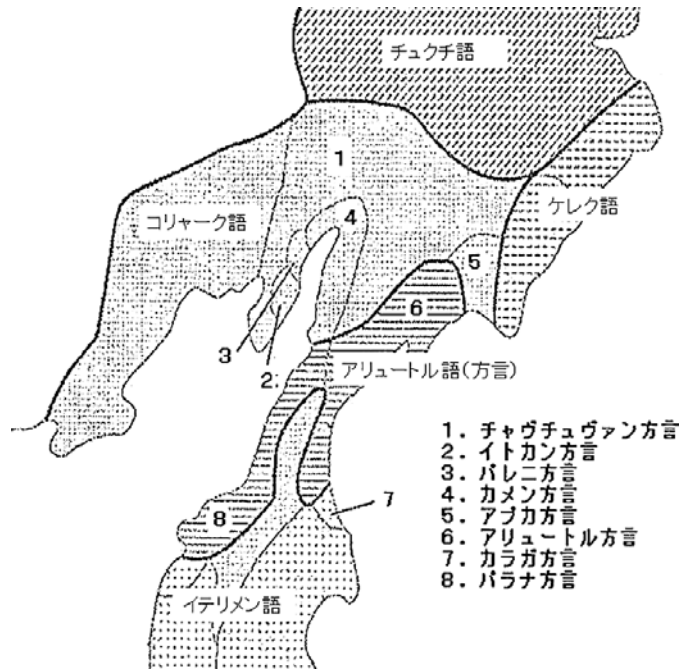
コリャーク語チャウチュヴァン方言にチュクチ語のような弱強による規則的な母音調和から逸脱した例が見出されることは、早くから知られていた。たとえば、Bogoras (1917, 1922) は、本来、強母音であるはずの /a/ が弱母音としてふるまうように見える例に着目し、このような逸脱は、/a/ が中性母音化していることによるものとした。逸脱例が /a/ の中性母音化と関わるとする指摘は、その後、Stebnitskij (1937), Moll (1960), Zhukova (1972), Skorik (1979), Muravyova (1980), Comrie (1981), Fortescue (2005) などにも見られる。その中でこれらの逸脱例を本格的に規則化して示したのは、Muravyova (1980) である。Muravyova (1980) は、チャウチュヴァン方言がチュクチ語のような弱強の2系列の母音調和に対して、I, I', II の3系列の母音調和を持つことを明確に主張した。

本稿では、Muravyova (1980) の提案した3系列の母音調和の規則を筆者自身の収集したデータにより検証し、その記述方法に対する修正案を提案する。具体的には、Muravyova (1980) が形態素と個々の母音の両方に対して系列を指定しているのに対し、筆者は、形態素レベルでのみ系列を指定することを提案する。さらに、この提案は、次の事実によっても支持されることを示す。

- a) 母音が含まれず、子音のみの形態素 (以下、「子音形態素」) も母音調和にかかわる。
- b) ロシア語の借用語幹は、母音のいかにかわらなく II 系列としてふるまう傾向がある。

3) 舌の高低ではなく、[±ATR] によるものであるという議論があり (松本 1998)、検証が必要であるが、これに関する踏み込んだ議論は別稿に譲る。

4) かつてはコリャーク語の一方言とされていたが、現在では独立の言語とみなされるようになっている。



地図1 チュクチ・カムチャツカ語族とコリャーク語諸方言
(Fortescue 2005 を基に作成)

本稿の構成は、以下のとおりである。第2節では、Muravyova (1980) の記述を検証し、その問題点を洗い出し整理したうえで修正案を提案する。その際、根拠として上述の a), b) を示す。第3節では、3系列の母音調和を修正案により記述し、修正案の妥当性を確認する。第4節では本稿の考察を総括する。なお、記述にあたっては、基底の形態音素 ({}), 表層の音素 (/ /), 音声 ([]) の3つのレベルを区別する。ただし、本稿の議論では形態音素表記と音素表記で足りるため、各例はこの2種類の表記で示し、音声表記は必要な場合に示すのにとどめる。具体的には、まず、基底の形態音素から母音調和の規則が付与された形態音韻の表記が導かれる。さらに、その他の形態音韻の規則が付与され、表層の音素表記による異形態が実現すると考える。それぞれの音素の音価については、脚注1を参照されたい。

本稿の分析で扱うチャウチュヴァン方言の音素表記によるデータは、主に同方言による語りや民話のテキスト Kurebito (ed.) (2014, 2016, 2017, 2018) から引用しているが、その他、現地調査においてエリシテーションにより聞き取ったデータも含まれる。

2. 母音か形態素か？

2.1. Muravyova (1980)

Muravyova (1980) は、チャウチュヴァン方言⁵⁾の母音調和の記述に際して形態音素と音素

5) Muravyova (1980) は「チャウチュヴァン方言」ではなく、「コリャーク語 корякский язык」としている。しかし、上述のとおり、コリャーク語は方言によって母音調和のふるまいに差があるため、この名称は不適切である。データを見る限り、Muravyova (1980) では、チャウチュヴァン方言を対象としていることは明らかである。したがって、本稿では混乱を避けるために「コリャーク語」ではなく「チャウチュヴァン方言」とする。

のレベルを区別し、前者から後者が導かれるプロセスを明示している。この点で、従来の音素論に終始した Zhukova (1972)⁶⁾ などの母音調和の記述とは一線を画す。また、チュクチ語のような規則的な母音調和からは逸脱したとされる例も含めて規則化し、3系列の母音調和を明確に打ち出している点でも先行研究より一歩進んでいる。

Muravyova (1980) によれば、チャウチュヴァン方言では、すべての形態素は、基底で I, I', II の3系列のいずれかに分かれ、異系列の形態素が1語に共起することはできない。また、12の母音形態音素があり、それらは I 母音 {i, e₁, u, ə₁}、I' 母音 {i*, a*, u*, ə*}、II 母音 {e₂, a, o, ə₂} の3系列に分かれる。3系列の母音のふるまいは次のように規則化している（各系列に対する数字や*の付与は Muravyova [1980] のまま）。

①【規則1】1語の中にII母音があるならば、I母音とI'母音はそれぞれ次のように対応するII母音に交替し、表層の音素 /e/, /a/, /o/, /ə/ として実現する。

{i}, {i*} → {e₂} → /e/
 {e₁}, {a*} → {a} → /a/
 {u}, {u*} → {o} → /o/
 {ə₁}, {ə*} → {ə₂} → /ə/

②【規則2】1語の中にII母音がなく、I母音とI'母音だけが含まれるならば、I母音は次のように対応するI'母音に交替し、表層の音素 /i/, /a/, /u/, /ə/ として実現する。

{i} → {i*} → /i/
 {e₁} → {a*} → /a/
 {u} → {u*} → /u/
 {ə₁} → {ə*} → /ə/

この2つの規則は、II系列はI, I'系列の両方をII系列に交替させることができ、I'系列はI系列をI'系列に交替させることができるが、I系列はどの系列もI系列に交替させることができないことを示している。すなわち、これら3系列母音は支配力の強さにおいて、II > I' > I という階層を成している。

Muravyova (1980: 161) は I' 形態素の {ka*li*} 「書く」に【規則1】が適用された例として (1a) を、【規則2】が適用された例として (1b) を挙げている。また、同じく I' 形態素の {qu*qlu*} 「穴が開く」に【規則2】が適用された例として (2) を挙げている。

(1) a. {ka*li*-jo-te} → {kale₂-jo-ta} → /kale-jo-ta/ 「ノートで」 (/kale/ 「書く」, /-jo/ 名詞化, /-ta/ 道具格) 【規則1】

6) Zhukova (1972) は次のように音素レベルのみで記述しているが、これではI系列がII系列に変換されるプロセスが明確に示されない。

(A) 母音音素は、舌の高低により /i, e, u/ (I系列) と /e, a, o/ (II系列) に分かれる。両系列は /i/-/e/, /e/-/a/, /u/-/o/ のように対立する。

(B) I系列の形態素は必ずI系列とII系列の2種類の異形態を持ち、同じ系列の母音を持つ形態素同士で結合する。

e.g. 語幹: /iv~ev/ 「話す」, /titi~tete/ 「針」, /lili~lele/ 「手袋」

接辞: /-te~-ta/ (道具格), /-nu~-no/ (様態格)

e.g. /lili-te/ 「手袋で (道具格)」: /lele-ŋqo/ 「手袋から (奪格)」

/uttəʔut/ 「木 (絶対格単数)」: /ott-ətəŋ/ 「木の方へ (方向格)」

b. {ka*li*-te₁} → {kali*-ta*} → /kali-ta/「手紙で」(/kali/「書く」, /-ta/道具格)【規則 2】

(2) {ye₁-qu*qlu*-lin} → {ya*-qu*qlu*-li*n} → /ya-quqlu-lin/「穴が開いた」(/ya-/結果相, /quqlu/「穴が開く」, /-lin/3単主)【規則 2】

これら3系列母音のうち、I母音 {i, e₁, u, ə₁} と II母音 {e₂, a, o, ə₂} は、チュクチ語の弱母音と強母音に対応する。一方、I'母音はチュクチ語にはない。I'系列はチュクチ語の弱母音の系列に対応する。両言語の母音系列の対応は表1のとおりである。

表1 チャウチュヴァン方言とチュクチ語の母音系列の対応 (Muravyova 1980)

	チャウチュヴァン方言	チュクチ語	
I	{i}, {e ₁ }, {u}, {ə ₁ }	弱	{i}, {e ₁ }, {u}, {ə ₁ }
I'	{i*}, {a*}, {u*}, {ə*}		
II	{e ₂ }, {a}, {o}, {ə ₂ }	強	{e ₂ }, {a}, {o}, {ə ₂ }

Muravyova (1980: 161) で示されたそれぞれの形態音素の具体例は、表2のとおりである。

表2 チャウチュヴァン方言とチュクチ語の母音形態音素の対応 (Muravyova 1980: 161)

形態音素		例		
Kor.	Chuk.	Kor.	Chuk.	意味
{i}	{i}	{iwl}	{ivl}	「長い」
{i*}	{i}	{yə*jni*k}	{yə ₁ nnik}	「野生動物」
{u}	{u}	{tuj} ⁷⁾	{tur}	「新しい」
{u*}	{u}	{u*lv}	{ulv}	「じっとした」
{e ₁ }	{e ₁ }	{e ₁ lvc ₁ }	{e ₁ lvc ₁ }	「別の」
{a*}	{e ₁ }	{a*jma*}	{e ₁ rme ₁ }	「支配する」
{ə ₁ }	{ə ₁ }	{ə ₁ np}	{ə ₁ np}	「年老いた」
{ə*}	{ə ₁ }	{tyə*m}	{tyə ₁ m}	「励む」
{e ₂ }	{e ₂ }	{e ₂ nm}	{e ₂ nm}	「崖」
{o}	{o}	{om}	{om}	「暖かい」
{a}	{a}	{aŋqa}	{aŋqa}	「海」
{ə ₂ }	{ə ₂ }	{yə ₂ ly}	{yə ₂ ly}	「皮」

ここで簡単にチュクチ語の母音調和を Muravyova (1980) に基づき見ておく。チュクチ語の母音形態音素は、弱の {i, e₁, u, ə₁} と強の {e₂, a, o, ə₂} という2系列に分かれ、両系列は1語に共起することはない ({e₁} と {e₂}, {ə₁} と {ə₂} はそれぞれ音声的には同じ [e] [ə])。弱母音は、語中に強母音を含む形態素 (以下、「強形態素」) がある場合、対応する強母音に交替する。すなわち、{e₁} → {a} → /a/, {i} → {e₂} → /e/, {u} → {o} → /o/, {ə₁} → {ə₂} → /ə/ となる (3a) ~ (3e)。Muravyova (1980) では具体例が少ないため、(3a) ~ (3e) の例は、特古斯 (1995) から採っている。例は Muravyova (1980) の表記方法に直して示す (5a~5c, 6a~6c, 7a~7b も同様)。

7) Muravyova (1980: 161) では、キリル文字で {туп}, すなわち {tur} となっているが、チャウチュヴァン方言には /p/ すなわち, /t/ はない。したがって、ここでは誤植とみなし、{tuj} と訂正する。

- (3) a. {e₁le₁ɣɣi-te₁} → /e₁leɣɣi-te/ 「腹の脂肪で」 (/e₁leɣɣi/ 「腹」, /-te/ 道具格)
 b. {nanə₂wwe₂-te₁} → {nanə₂wwe₂-ta₂} → /nanəwwe-ta/ 「直腸で」
 c. {pl₁k-qas-Ø₁⁸⁾} → {plak-qas-Ø₂} → /plaq⁹⁾-qas/ 「ブーツの片方」 (/plaq/ 「ブーツ」, /-qas/ 「片方」)
 d. {ɣa-rilw-ma} → {ɣa-re₂lw-ma} → /ɣa-relw-ma/ 「眉と」 (/ɣa-..-ma/ 随格, /relw/ 「眉」)
 e. {nute₁-ɣtə₂} → {nota-ɣtə₂} → /nota-ɣtə/ 「ツンドラへ」 (/nota/ 「ツンドラ」, /-ɣtə/ 方向格)

このように、チュクチ語では弱と強の間で規則的な母音調和が起こる。一方、チャウチュヴァン方言にはチュクチ語の弱強に相当する I, II 系列以外に I' 系列 {i*, a*, u*, ə*} がある。そのために、チュクチ語のような弱強の母音調和からは逸脱した不規則な母音調和を示しているように見える。しかし、上述の Muravyova (1980) の規則は、I' 系列が、支配力の強さによる II > I' > I という3項対立の階層に組み込まれ、その階層にしたがい規則的な母音調和をしていることを明確に示している。

2.2. 問題点と修正案

とはいえ、Muravyova (1980) の記述には、修正の余地も残されている。特に問題となるのは、母音調和を形態素のレベルで扱っているのか、母音レベルで扱っているのかがあいまいな点である。たとえば、3系列を基底において母音形態音素にも形態素にも指定している一方で、上述(2.1.)の規則①②では母音形態音素にしか言及していない。このような不統一は、系列を指定すべき母音を持たない子音形態素を記述する場合に矛盾となって現れる。すなわち、母音を持つ形態素では、上述の(1a)(1b)(2)の {ka*li*-jo-te₁}, {ka*li*-te₁}, {ye₁-qu*qlu*-lin} のように、母音に系列を付与している一方で、子音形態素では {-n}(I), {mk}(I'), {-ŋ}(II) のように形態素に系列を付与している。

子音形態素は3系列全てに一定数存在するため、このような不統一は無視できない¹⁰⁾。ちなみに、管見のかぎりでは、次のような子音形態素が確認されている。

- (4) a. I 形態素：{nt} 「～をする」, {ln} 「みなす」, {pj} 「外す」, {qv} 「狭い」, {cc} 「赤い」, {kt} 「硬い」, {ml'} 「細かい」, {jq} 「速い」, {-lv} 「～の集まり」, {-l'q} 「表面」, {-lʃ} (分詞), {-k} (場所格), {-n} (絶対格単数)
 b. I' 形態素：{mk} 「多い」, {tʃ} 「あふれる」, {np} 「置く」
 c. II 形態素：{tm} 「殺す」, {jp} 「着る」, {tv} 「話す、言う」, {-jv} (強調), {-ŋ} (与格), {-cy} (軽蔑), {-nv} 「～する場所」

形態素だけでなく、母音形態音素にも系列を指定するという方針を取るならば、他の形態素の表記との整合性を確保するために、子音形態素には音声的実体のないゼロ母音を立て、それ

8) {-Ø} はゼロ形態素を表わす。子音か母音かが指定できないため、暫定的に {-Ø₁}, {-Ø₂} のように系列を表すものとする。

9) {k} は後続する形態素初頭の {q} に同化する。

10) チュクチ語について子音形態素が母音調和に関与することは従来から指摘されてはきたが (Kenstowicz 1979, 箕浦 1989, 特古斯 1995, 松本 1998), その扱いについては未確定のままである。Kenstowicz (1979) は、子音形態素を声調言語において母音が歴史的変化により失われた後も、その母音にかかわる声調が隣接する形態素の声調パターンに影響を与える現象と類似していると指摘している。

に系列を指定するといった方法を取るしかない。

しかし、母音調和は形態素単位で起こるのであって、母音単位で起こるのではない。ここで、母音調和が母音ではなく、形態素に対して付与される規則であることを支持する一例を挙げる。ロシア語の借用語幹がチャウチュヴァン方言固有の形態素と結びついた場合、両者がどのようなふるまうのかを観察してみたい。まず、ロシア語借用語幹を見ると、チャウチュヴァン方言の II 形態素と結びついた場合、/i/, /u/ などの母音が II 母音に交替している例は、管見のかぎり見当たらない。(5a) ~ (5c) の例を見られたい。

- (5) a. /internat-etən/ 「寄宿舎学校へ」 (/internat/ 「寄宿舎学校」 < [露] internat, /-etən/ 方向格 ← {-e₂tə₂n})
 b. /armija-ŋqo/ 「軍隊から」 (/armija/ 「軍隊」 < [露] armija, /-ŋqo/ 奪格 ← {-ŋqo})
 c. /turetski-cʃenan/ 「トルコ風に」 (/turetski/ 「トルコの」 < [露] turetskij, /-cʃenan/ 「ように」 ← {-cʃe₂nan})

一方、チャウチュヴァン方言固有の I 形態素は、ロシア語の借用語幹の母音のいかんにかかわらず、II 系列に交替している。(6a) ~ (6g) では、接尾辞 {-kin} (関係), {-wi} (絶対格複数), {-yili} 「探す」, {-u} (様態格) がそれに該当する¹¹⁾。

- (6) a. /brigada-ken/ 「ブリガードの」 (/brigada/ 「ブリガード」 < [露] brigada, /-ken/ 関係 ← {-kin})
 b. /paxaci-ken/ 「パハチの」 (/paxaci/ 「パハチ (地名)」 < [露] paxac¹²⁾ i, /-ken/ 関係 ← {-kin})
 c. /sibir-ken/ 「シベリアの」 (/sibir/ 「シベリア」 < [露] sibir', /-ken/ 関係 ← {-kin})
 d. /soci-ken/ 「ソチの」 (/soci/ 「ソチ (地名)」 < [露] soci, /-ken/ 関係 ← {-kin})
 e. /macina-we/ 「車 (絶複)」 (/macina/ 「車」 < [露] mashina, /-we/ 絶複 ← {-wi})
 f. /caqal-yele/ 「砂糖を探す」 (/caqal/ 「砂糖」 < [露] saxar, -yele 「探す」 ← {-yili})
 g. /putin-o/ 「プーチンとして」 (/putin/ 「プーチン (人名)」 < [露] putin, /-o/ 様態格 ← {-u})

これらの例から、借用語幹は含まれる母音のいかんにかかわらず II 形態素としてとらえられていることがうかがえる。それゆえ、チャウチュヴァン方言固有の接尾辞はこれに同化して II 系列で実現するのである。これは、母音調和が形態素レベルで起こることを裏づける一例であるといえよう。

とはいえ、本来の母音調和に従っていると考えられる例もわずかながら観察される。たとえば、(7a) (7b) では、caj 「お茶」 < [露] čaj は I' 形態素のようにふるまっている。

11) I 系列の接尾辞が付加された次のような例も確認された。ただし、この 2 例だけでは、/-ta/ が I' 系列で実現している可能性も否定できない。

a. /butəlka-ta/ 「酒で」 (/butəlka/ 「酒」 < [露] butylka, /-ta/ 道具格 ← {-te_i})

b. /pəciqa-ta/ 「鳥で」 (/pəciqa/ 「鳥」 < [露] ptisa, /-ta/ 道具格 ← {-te_i})

12) コリャーク語同様、[ɟ] を表わす。

- (7) a. /caj-u/「お茶を飲む」(/caj/「お茶」, /-u/「飲む」←{-u})
 b. /ʏa-caj-u-lqiw-lin/「彼／彼女はお茶を飲みに行った」(/ʏa-/結果相←{ʏe₁-}, /-lqiw/「～しに行く」←{-lqiw}, /-lin/3単主←{-lin})

このことは、この語のチャウチュヴァン方言への浸透度の深さと関係があるのではないかと推測される。たとえば、1音節語を嫌うこの方言の特徴を反映して、絶対格単数形は/cajcaj/と、重複により2音節語に改編されていることなどが、それをうかがわせる。ちなみにこの方言には、絶対格単数形を重複による2音節語によって表わす固有語の例が多くみられる (e.g. /linlin/「心臓」, /liwliw/「卵」, /tiltil/「翼」, nejnej「山」など)。

ところで、母音レベルと形態素レベルを截然と区別しないまま母音調和を論じているのは、Muravyova (1980) だけではない。伝統的なコリャーク語研究では母音調和の記述においては母音系列についての記述が先行し、形態素は二義的に扱われる傾向があった (Zhukova 1972 など)¹³⁾。しかし、母音調和は、形態素の系列の違いが表層において母音の違いとして現れるという視点で記述し直すことが必要であると考えられる。

以上から、チャウチュヴァン方言の母音調和に関し、Muravyova (1980) に対して次の修正案を提案する。

- A) チャウチュヴァン方言の全ての形態素は基底で I, I', II の3系列に分かれる。
 B) 異系列の形態素は1語の中に共起できないが、同系列の形態素同士が結合する場合には、その系列が保持される。
 C) 3系列は支配力の強さにより II > I' > I という階層を成している。すなわち、II 形態素は、I 形態素と I' 形態素を II 系列に交替させる。I' 形態素は、I 形態素を I' 系列に交替させる。I 形態素は、どの系列も交替させることができない。
 D) 母音形態音素は、{I}, {A}, {U}, {E} の4つである。これらは /i/, /e/, /a/, /u/, /o/, /ə/ という6音素として実現される。形態音素と音素の対応関係は次の表3のとおりである。

表3 チャウチュヴァン方言の母音形態音素と音素の対応

	{I}	A	U	E}
I	/i	e	u	ə/
I'	/i	a	u	ə/
II	/e	a	o	ə/

以上のように、形態素にのみ系列を指定することにより、記述の煩雑さが軽減され、上述の子音形態素の問題も解消する。

ちなみに I, I', II のそれぞれの系列において実現される母音音素を基本母音図上で示すと、図1のようになる。点線で囲った部分が I 系列、一重線で囲った部分が I' 系列、二重線で囲った部分が II 系列である。

13) Zhukova (1972: 22) は、まず、I 系列、II 系列母音を示したうえで、系列の違いによる異形態を挙げ、最後に「コリャーク語の母音調和は、母音同士の相互作用であるだけでなく、語の中で結合する形態素同士の相互作用でもある」としている。

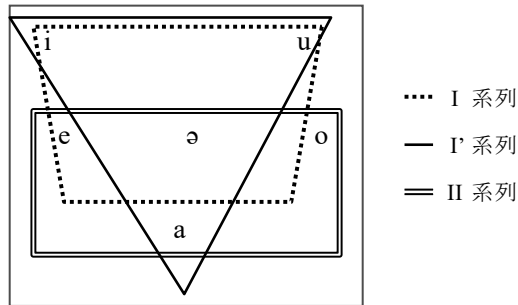


図1 チャウチュヴアン方言の母音音素体系

ところで、この修正案は、Dunn (1999) がチュクチ語の母音調和を記述する際に採用した方法とその骨子は共通している。Dunn (1999) は、基底で {i}, {e}, {u} の3つの母音を立て、これらが形態素に付与される母音調和のプロソディ (VH) により表4のように実現するとしている。

表4 チュクチ語の母音調和のペア (Dunn 1999: 48)

-vowel harmony	[i]	[e]	[u]
+vowel harmony	[e]	[a]	[o]

具体例として挙げられているのは、次の2語である。

- (8) a. {tələ^{VH}-n^{VH}} → {tələ-n^{VH}} 「道」(tələ 「行く」, -n 「場所」絶単)
 b. {kəmlilü^{VH}-n^{VH}} → {kəmlilü-n^{VH}} 「布製コート」(kəmlilü 「布製コート」, -n 絶単)

ただし、本稿の修正案はDunn (1999) とは大きく2つの点で異なる。第一点は、Dunn (1999) は基底で {E} を立てていないのに対し、本稿は立てている点である。表層で /ə/ で実現する {E} を立てないことについて、Dunn (1999) は、[ə] は音節化のプロセスで挿入される母音にすぎず、母音調和には関与しないためとしている。

チュクチ語の中舌母音の [ə] の扱いについては、これまで、母音調和に全く関与しないとする見解 (松本 1998, Dunn 1999)、中性母音であるとする見解 (箕浦 1989)、母音調和にかかわるとする見解 (Muravyova 1980, Kenstowicz 1979, 特古斯 1995) などがあり、一致を見えない。しかし、/ə/ しか母音がない形態素でも弱形態素と結合する場合と、強形態素と結合する場合は語彙的に明確に決まっている。たとえば、チュクチ語の例 (9a) では、/ənn/ 「魚」は弱形態素の /-tʃul/ 「断片」と結合しているため、弱形態素であることがわかる。(9b) では、/lpənr/ は強形態素の /-nat/ と結合しているため、強形態素であることがわかる。

- (9) a. /ənn-ə-tʃul/ 「魚肉」(/ənn/ 「魚」, /-ə-/ 挿入¹⁴⁾, /-tʃul/ 「断片」)
 b. /t-ə-lpənr-ə-nat/ 「私はそれらを与えた」(/t-/ 1 単主, /-ə-/ 挿入, /lpənr/ 「与える」, /-ə-/ 挿入, /-nat/ 3 複目)

14) グロスで「挿入」とされる /-ə-/ の詳細は、3.3.1. を参照されたい。3.3.1. ではチャウチュヴアン方言の /-ə-/ について論じているが、チュクチ語でも同様である。

同様のことは、チャウチュヴァン方言にもあてはまる。したがって、本稿では、{E}を形態音素に加えることとする（詳細については第3節参照）。

Dunn (1999) と異なる第二点は、3系列の表示のしかたである。チュクチ語は2系列の母音調和であるため、系列の違いは [+VH] か [-VH] のように二項対立的に示せばよいが、チャウチュヴァン方言では三項対立的に示す必要がある。本稿では視認性も考慮して、語例の表記と混同しやすい [+VH] [-VH] は避け、I 形態素は点線、I' 形態素は一重線、II 形態素は二重線の下線で示すものとする。ゼロ形態素は母音調和において他の形態素に対する支配力がないため、全て I 系列とし、{∅} のように示す。/ku...-ŋ/ (不完了)、/te...-ŋ/ 「作る」、/e...-ki/ 「～がない」などの接周辞は、前部要素、後部要素合わせて1つの形態素とみなし、{kU...-ŋ}, {tA...-ŋ}, {A...-kI} のように系列を指定する。

なお、第1節で述べたとおり、本稿では各例は基底の形態音素表記 ({}) と表層の音素 (/ /) によって記述する。具体的には、語全体に及ぶ母音調和と形態素境界で部分的に起きるその他の形態音韻現象は区別し、まず、基底の形態音素のレベルで母音調和規則を付与する。次に、その他のシュワ挿入、母音脱落、子音脱落、子音同化といった形態音韻規則を付与し、表層の音素表記による異形態素が実現するととらえる。逆の順序で規則を付与すると、たとえば、基底では認められないシュワをシュワ挿入規則により基底で記述しなければならないという矛盾が生じてしまう¹⁵⁾。以上から、母音調和規則→その他の形態音韻規則という順序を採用することにより、記述の明確性・整合性が担保されると考える。

3. 3系列の母音調和

本節では、チャウチュヴァン方言の母音調和の具体例を示し、2.2. で提案した修正案 A), B), C), D) の妥当性を確認する。まず、チュクチ語にはない I' 形態素について若干の説明をしておく。次に同じ系列の形態素同士で結合する際のふるまい、さらに、II 形態素の I, I' 形態素に対するふるまい、I' 形態素の I 形態素に対するふるまいをそれぞれ観察する。

3.1. I' 形態素

チャウチュヴァン方言には、チュクチ語のような弱強2系列の母音調和からは逸脱したように見える例、すなわち、/i/, /u/, /a/ などが1形態素、あるいは1語の中に共起している例が見られる。たとえば、次の (10a) (10b) は /i/, /a/, (10c) (10d) は /u/, /a/, (10e) (10f) は /i/, /a/, /u/ がそれぞれ共起している例である。このように /i/ と /a/, /u/ と /a/, /i/ と /u/ と /a/ が共起する例は、チュクチ語では許容されない。

(10) a. /qapti-n/ 「背中」 (/qapti/ 「背中」, /-n/ 絶単)

b. /micy-ə-tajn-ə-k/ 「火のそばで」 (/micy/ 「火」, /-ə-/ 挿入, /-tajn/ 「縁」, /-ə-/ 挿入, /-k/ 場所格)

c. /acſ-u/ 「脂肪 (複)」 (/acſ/ 「脂肪」, /-u/ 絶複)

15) たとえば、(17a) の派生の順序を変えた次の例を見られたい。基底の形態音素レベルに挿入母音のシュワを挿入しなければならず、記述の整合性が担保できない。

??{wAjAm}+{-nqU} → {wAjAm-ə-nqU} → /wajam-ə-nqo/ 「川から」 (/wajam/ 「川」, /-ə-/ 挿入, /-nqo/ 奪格)

- d. /a-kumŋ-at-ka/ 「叫ばない」 (/a-..-ka/ 否定, /kumŋ/ 「声」, /-at/ 動詞化)
 e. /kinuŋva-w/ 「肉 (複)」 (/kinuŋva/ 「肉」, /-w/ 絶複)
 f. /jicʰamji-tumy-ə-n/ 「兄弟」 (/jicʰamji/ 「兄弟」, /tumy/ 「友人」, /-ə-/ 挿入, /-n/ 絶単)

コリャーク語の母音調和にこのような逸脱例がみられることは、先行研究においてもすでに指摘されている。Stebnitskij (1937) は、コリャーク語の3つの方言、すなわち、西のパラナ方言、東のアリュートル方言（上述のとおり、現在は「アリュートル語」）、その中間に分布するチャウチュヴァン方言をチュクチ語と比較し、チュクチ語の /e/ に対してパラナ方言では /e/, アリュートル方言では /a/, チャウチュヴァン方言では /e/, /a/ が対応しているとし、具体例として (11) を挙げている（語例の表記は、本稿の表記方針に合わせて一部改訂している。Pa. はパラナ方言, Al. はアリュートル語, Chaw. はチャウチュヴァン方言, Chuk. はチュクチ語の略）。

(11) Pa.	Al.	Chaw.	Chuk.	
/ejek/	/ajak/	/ejek/	/eek/	「油脂ランプ」
/wejem/	/vajam/	/wejem/	/weem/	「川」
/lewut/	/lavut/	/lewut/	/leut/	「頭」
/esʰən/	/asʰan/	/acʰan/	/esən/	「脂肪」
/remkən/	/ramkən/	/jamkən/	/remkən/	「宿营地」
/elek/	/alak/	/alak/	/elek/	「夏に」

(Stebnitskij 1937: 293)

確かに、Stebnitskij (1937) のこの指摘により、次の (12a) ~ (12i) のように /a/ が /i/ や /u/ と共起する例は説明できる。全ての例において、チャウチュヴァン方言の /a/ がチュクチ語の弱母音の系列の /e/ に対応している。したがって、これらの例は本来 I 系列で、唯一 /a/ が例外的に出現しているのだと考えればよいように思われる。語例末尾に【Chuk】として対応するチュクチ語の形態素を示す¹⁶⁾。

- (12) a. /nalɣ-ə-tʃul/ 「毛皮の断片」 (/nalɣ/ 「毛皮」, /-ə-/ 挿入, /-tʃul/ 「断片」) 【Chuk】{nAlɣ^[VH]}
 → /nely/
 b. /kajŋ-ə-tʃul-in/ 「熊肉の」 (/kajŋ/ 「熊」, /-ə-/ 挿入, /-tʃul/ 「断片」, /-in/ 所有) 【Chuk】
 {kAjŋ^[VH]} → /kejŋ/
 c. /piŋa-juʃ-i/ 「雪が降り出した」 (/piŋa/ 「雪」, /-juʃ/ 「始まる」, /-i/ 完了) 【Chuk】
 {pIŋA^[VH]} → /pine/
 d. /kali-cit-ə-lʃ-ə-muju/ 「私達は学生だ」 (/kali/ 「書く」, /-cit/ 相互, /-ə-/ 挿入, /-lʃ/ 分詞,
 /-ə-/ 挿入, /-muju/ 1 複主) 【Chuk】{kAlI^[VH]} → /keli/
 e. /pələk-u/ 「ブーツ (複)」 (/pələk/ 「ブーツ」, /-u/ 絶複) 【Chuk】{plAk^[VH]} → /plek/
 f. /ajma-nu/ 「リーダーとして」 (/ajma/ 「リーダー」, /-nu/ 様態格) 【Chuk】{Ar^[17] Am^[VH]}
 → /rem/

16) チュクチ語の語形は、Inenlikej (1982), Kurebito, M. (ed.) (2001), Zhukova and Kurebito, T. (2004) で確認し、筆者が基底の形態素に表記し直した。

17) コリャーク語の {j} はチュクチ語の {r} に対応する。

- g./ajat-i/「彼／彼女は倒れた」(/ajat/「倒れる」, /-i/完了)【Chuk】{ArAt^[VH]}→/eret/
 h./ku-kav-ə-ŋ/「彼／彼女は慣れている／いた」(/ku...-ŋ/不完了, /kav/「慣れる」,
 /-ə-/挿入)【Chuk】{kAv^[VH]}→/kev/
 i./qaj-ə-kmin-ə-jək/「子供達が」(/qaj-/指小, /-ə-/挿入, /kmin/「子供」, /-ə-/挿入,
 /-jək/有生・複・場所格(能格))【Chuk】{qA^[VH]}→/qej-/, {kmIn^[VH]}→/kmin/

しかし、次の(13)のような例は、I系列の例外とみなすことはできない。なぜならば、チュクチ語の/e/に対応する/a/が含まれる形態素/jicʰamji/「兄弟」が、I形態素{yA...tA}を/ye...te/ではなく、/ya...ta/で実現させているからである。もし、/jicʰamji/がI系列であるとするならば、{yA...tA}は/ye...te/で実現しなければならない。

- (13) /ya-jicʰamji-ta/「兄弟と」(/ya...ta/共同格←{yA...tA}, /jicʰamji/「兄弟」)【Chuk】
 {Icʰem^[VH]}→/jicʰem/

さらに、次の(14a)～(14c)のように、/a/だけではなく、/i/, /u/, /ə/を含む形態素あるいは子音形態素が、語中のI形態素に含まれる{A}が/a/で実現する引き金になっていると考えられる例もある¹⁸⁾。

- (14) a./na-ku-n-qit-an¹⁹⁾-ŋ-ə-naw/「彼／彼女はそれらを凍らせている／いた」(/na-/反転,
 /ku...-ŋ/不完了, /n...-an/使役, /qit/「凍る」, /-ə-/挿入, /-naw/3複目)【Chuk】
 {qIt^[VH]} cf. /ne-k-iw-ŋ-ə-new/「彼／彼女は彼らに言っている／いた」(/iw/「言う」)
 b./ya-kəlt-ə-lin/「それを結んだ」(/ya-/結果相, /kəlt/「結ぶ」, /-ə-/挿入, /-lin/3単目)
 【Chuk】{kEl^[VH]}
 c./na-ku-l²⁰⁾-ləy-an-ŋ-ə-naw/「彼らはそれらを溶かしている／いた」(/na-/反転, /ku...
 -ŋ/不完了, /l...-an/使役, /ləy/「溶ける」, /-ə-/挿入, /-naw/3複目)【Chuk】{EY^[VH]}
 d./ya-np-ə-linaw/「それらを置いた」(/ya-/結果相, /np/「置く」, /-ə-/挿入, /-linaw/
 3複目)【Chuk】{np^[VH]}

18) この他の逸脱例として、/i/を含む形態素がII形態素と共に起している例が散見される。たとえば、名詞化接辞の/-yin/は/i/を含みながらII形態素同様にふるまう。

a. /jonat-yin-ə-n/「生活」(/jonat/「暮らす」, /-yin/名詞化, /-ə-/挿入, /-n/絶単)
 b. /tajk-ə-yin-o/「作ったもの(複)」(/tajk/「作る」, /-ə-/挿入, /-yin/名詞化, /-o/絶複)
 c. /et-yin-ə-n/「存在」(/et/「ある」, /-yin/名詞化, /-ə-/挿入, /-n/絶単)

(a) (b) (c)の動詞語幹/jonat/, /tajk/, /et/の基底形はそれぞれ{jUnAt}, {tAjk}, {It}でI系列である。/n/ (絶単), /o/ (絶複)もそれぞれI系列の{-n}, {-U}でI系列である。したがって、この3つの動詞語幹が強母音に転換しているのは、/-yin/によるものと考えざるをえない。ちなみに/-yin/は、Moll (1960)では‘-yəjn’とされている(e.g. /jonatyəjnən/「生活」, /vetyəjnən/「仕事」, /matevatyəjnən/「疑い」など)。このことから、/yəjn/→/-yin/という変化が起きていることが推測される。ちなみに、チュクチ語、アリュートル語では‘-yərn’が対応している(Kurebito, M. ed. 2001)。以上から、チャウチュヴァン方言では通時的には{-yəjn}であったが、共時的には{-yin}ということになる。

19) 基底では、{n...At}。末尾の{t}は、後続の形態素の初頭が鼻音である場合、これに同化して/n/になる。

20) 基底では、{n...At}。{n}は後続する{ləy}の初頭子音{l}に同化して/l/になる。

(14a) では、/qit/「凍る」以外はすべて I 形態素である。すなわち、/na-/ (反転) は {nA-}, /ku...-ŋ/ (不完了) は {kU...-ŋ}, /n...-an/ (使役) は {n...-At} を基底に持つ。したがって、{A} が /a/ で実現するのには、/qit/ が関与していると考えられる (cf. であげた同じく母音が /i/ のみを含む I 形態素 /iw/ の例と比較されたい)。(14b) では、{yA-} (結果相), {-lIn} (3 単目) がいずれも I 形態素であるため、{yA-} が /ya-/ で現れているのには、/kəlt/「結ぶ」が関与していると考えられる。(14c) では、/ləy/「溶ける」以外はすべて I 形態素である。すなわち、/na-/ (反転) は {nA-}, /l...-an/ は {n...-At}, /-naw/ は {-nAw} の異形態である。したがって、/ləy/ がこれらの異形態の現れに関与していると考えられる。(14d) では I 形態素である {yA-} (結果相), {-lInAw} (3 複目) がそれぞれ /ya-, /-linaw/ で実現しているのには、子音形態素 {np}「置く」が関与していると考えられる。

これらの例では、/a/ だけでなく、/i/, /u/, /ə/ や子音形態素が、母音調和に関し同様にふるまっている。これらを説明するには、Muravyova (1980) のように新たに第 3 の系列、すなわち I' 系列を立てる必要があることがわかる。以下では、2.2. の修正案にもとづき 3 系列の母音調和の具体例を見ていく。

3.2. 同系列の形態素同士

2.2. の修正案 B) で示したように、同系列の形態素が結合する場合には、系列の交替は起こらず、基底の系列が保持される。(15a) (15b) (15c) は I 形態素同士、(16a) (16b) (16c) は II 形態素同士がそれぞれ結合した例である。I' 形態素同士が結合した例は現在のところ確認されていない。

- (15) a. {tItI}+{-nA} → /titi-ŋe/「針」 (/titi/「針」, /-ŋe/ 絶単)
 b. {UjAtIkI}+{-tA} → /ujetiki-te/「トナカイ橇で」 (/ujetiki/「トナカイ橇」, /-te/ 道具格)
 c. {Itt}+{-tʃU}+{-∅} → /itt-ə-tʃul/「氷片」 (/itt/「氷」, /-ə-/ 挿入, /-tʃul/「断片」)
- (16) a. {wAnI}+{jA}+{-nqU} → /wəŋe-ja-ŋqo/「縫製工場から」 (/wəŋe/「縫う」, /ja/「家」, /-ŋqo/ 奪格)
 b. {InAjA}+{-jtEn} → /enaja-jtən/「隣へ」 (/enaja/「隣」, /-jtən/ 方向格)
 c. {ŋAnI}+{-nqAl} → /ŋane-ŋqal/「あの方向に」 (/ŋane/「あの」, /-ŋqal/「方向に」)

3.3. II 形態素 + I, I' 形態素

2.2. の C), D) で述べたように、II 形態素は 3 系列の母音調和の階層の最上位に位置し、I, I' 形態素に対して支配力を持つ。したがって、I, I' 形態素と共起する場合には、これらを II 形態素に交替させる。その結果、表 3 で示したように、基底の {I, A, U, E} は、I, I' 形態素いづれも /e, a, o, ə/ で実現する。以下では、I 形態素と共起する場合と、I' 形態素と共起する場合に分けて見ていく。

3.3.1. I 形態素と共起する場合

以下、具体例を挙げる。

- (17) a. {wAjAm}+{-nqU} → {wAjAm-nqU} → /wajam-ə-ŋqo/「川から」 (/wajam/「川」, /-ə-/ 挿入, /-ŋqo/ 奪格)

- b. {kU...}+{Iv}+{-nvU}+{-n}+{-Ø} → {kU-Iv-nvU-n-Ø} → /k-ew-ŋəvo-ŋ/²¹⁾「彼／彼女はいつも言っている／いた」(/k...-ŋ/ 不完了, /ew/「言う」, /-ŋəvo/ 習慣)
- c. {kU...}+{tva}+{-n}+{-I} → {kU-tva-n-I} → /ko-tva-ŋ-e/「彼ら二人がいる／いた」(/ko...-ŋ/ 不完了, /tva/「いる」, /-e/ 3 双主)

(17a) では I 形態素の {wAjAm} が II 形態素の {-ŋqU} により {wAjAm} に交替し、異形態 /wajam/ で実現している。(17b) では II 形態素の {-nvU} により I 形態素の {kU...-n} (不完了), {Iv}「言う」, {-Ø} がそれぞれ {kU...-n}, {Iv}, {-Ø} に交替し、異形態 /k...-ŋ/, /ew/ で実現している。(17c) では II 形態素 {tva} により, {kU...-n}, {-I} が {kU...-n}, {-I} に交替し、/ko...-ŋ/, /-e/ で実現している。

母音は {E} しか含まれない II 形態素も、I 形態素を II 形態素に交替させる。

- (18) a. {mIl'Ut}+{yEcy}+{-k} → {mIl'Ut-yEcy-k} → /mel'ot-yəcy-ə-k/「うさぎの毛に」(mel'ot「うさぎ」, /yəcy/「毛」, /-ə-/ 挿入, /-k/ 場所格)
- b. {t...}+{mEny}+{IlyEtAv}+{-k}+{-Ø} → {t-mEny-IlyEtAv-k-Ø} → /t-ə-məny-eljətav-ə-k/「私は手を洗った」(/t...-k/ 1 単主, /-ə-/ 挿入, /məny/「手」, /eljətav/「洗う」, /-ə-/ 挿入)
- c. {mAjn}+{kEccEl}+{-lS}+{-IyEm} → {mAjn-kEccEl-lS-IyEm} → /majn-ə-kəccəl-ə-lS-eyəm/「私は額が広い」(/majn/「大きい」, /-ə-/ 挿入, /kəccəl/「額」, /-ə-/ 挿入, /-lS/ 分詞, /-eyəm/ 1 単主)

(18a) では, {mIl'Ut} が /me'lot/ で実現されるのは, {yEcy} が II 形態素であるためである。(18b) では, {IlyEtAv} が /eljətav/ で実現されるのは, {mEny} が II 形態素であるためである。(18c) では, {mAjn}「大きい」, {-IyEm} (1 単主) がそれぞれ /majn/, /-eyəm/ で実現されるのは, {kEccEl} が II 形態素であるためである。

ところで、基底の母音形態音素のひとつとして立てた {E} は、形態素間に現れる挿入母音の /ə/ とは区別しなければならない。後者は、形態素の結合に際して子音連続を避けるために挿入される母音であり、形態音素としては認められない。ただし、挿入母音であっても [ajmak]「包み」: [ajmək]「水汲みに行く」, [witwit]「ワモンアザラシ」: [wətət]²²⁾「葉」のように弁別的に働くことがあるため、音素としては認める必要がある。

挿入母音の /ə/ は、語頭、語末で 2 子音連続が起きる場合には、その子音間、語中で 3 子音が連続する場合には、通常、第 2 子音と第 3 子音の間、かつ形態素境界に挿入される (19a) (19b)。

- (19) a. /n-ə-tuj-qin/「それは新しい」(/n-/ 属性, /-ə-/ 挿入, /tuj/「新しい」, /-qin/ 3 単主)
- b. /t-ə-miml-ə-lp-et-ə-k/「私は水を飲んだ」(/t...-k/ 1 単主, /-ə-/ 挿入, /miml/「水」, /-ə-/ 挿入, /lp/「飲む」, /-et/ 逆受動, /-ə-/ 挿入)

21) {kU...-n} の {U} は、後続する動詞語幹 {Iv} が母音始まりであるため、脱落。{Iv} の {v} は音節末では /w/ で実現される。{-nvU} は、3 子音連続を避けるためにシュワが挿入されて /-ŋəvo/ となる。

22) [wətət] は基底では {wt} が立てられる。II 形態素と共起し、かつ /ə/ のない複合名詞 /qoja-wt-o/「ミチャナギ」(/qoja/「トナカイ」, /wt/「葉」, /-o/ 絶複) があることからわかる。

ただし、形態素境界の前に1子音、後に2子音連続がある場合には、形態素境界が優先され、/ə/は第1子音と第2子音の間に挿入される(20a)(20b)。

- (20) a. /ko-jajaj-ə-tko-ŋvo-la-ŋ/「彼らはいつも太鼓を叩いている／いた」(/ko...ŋ/ 不完了, /jajaj/「太鼓」, /ə-/挿入, /-tko/動詞化, /-ŋvo/習慣, /-la/複数)
 b. /ku-ŋev-ə-nn'u-ŋ-i/「彼ら二人は娘に求愛している／いた」(/ku...ŋ/ 不完了, /ŋev/「娘」, /ə-/挿入, /nn'u/「求愛する」, /-i/3双主)

II系列の子音形態素も、I形態素をII形態素に交替させる。(21a)(21b)(21c)は、{nm}「殺す」がI形態素をII系列に交替させている例である。

- (21) a. {mEt-}+{kU-}+{nm}+{-ŋ}+{-nAw} → {mEt-kU-nm-ŋ-nAw} → /mət-ko-nm-ə-ŋ-naw/
 「私達は彼ら／それらを殺している／いた」(/mət-/1複主, /ko...ŋ/不完了, /nm/「殺す」, /ə-/挿入, /-naw/3複目)
 b. {yA-}+{nm}+{-In} → {yA-nm-In} → /ya-nm-ə-len/「彼／彼女を殺した」(/ya-/結果相, /nm/「殺す」, /ə-/挿入, /-len/3単目)
 c. {nm}+{-nI}+{-n}+{-Ø} → {nm-nI-n-Ø} → /təm²³-ne-n/「彼／彼女が／彼／彼女を殺した」(/təm/「殺す」, /-ne/3単主, /-n/3単目)

(22a)(22b)は、II系列の子音形態素{-ŋ}の例である。

- (22) a. {tAwʃAl}+{-ŋ} → {tAwʃAl-ŋ} → /tawʃal-ə-ŋ/「干し魚に」(/tawʃal/「干し魚」, /ə-/挿入, /-ŋ/与格)
 b. {wInv}+{-ŋ} → {wInv-ŋ} → /wenv-ə-ŋ/「道に」(/wenv/「道」, /ə-/挿入, /-ŋ/与格)

3.3.2. I'形態素と共起する場合

次にII形態素がI'形態素と共起する例を見る。

- (23) a. {kmIn}+{-jEk}+{-ŋ} → {kmIn-jEk-ŋ} → /kəmen-ə-jək-ə-ŋ/「子供たちに」(/kəmen/「子供」, /ə-/挿入, /-jək/有生・複数, /ə-/挿入, /-ŋ/与格)
 b. {q-}+{kUmn}+{-At}+{-lA}+{-jkEnI}+{-tEk} → {q-kUmn-At-lA-jkEnI-tEk} → /q-ə-komŋ-al²⁴-la-jkəne-tək/「あなたたちは叫んでいなさい」(/q-/希求2単主, /ə-/挿入, /komŋ/「声」, /-al/動詞化, /-la/複数, /-jkəne/不完了, /-tək/2単主)

(23a)では、II形態素の{-ŋ}によりI'形態素の{kmIn}「子供」とI形態素の{-jEk} (有生・複数)がII形態素に交替し、表層でそれぞれ/kəmen/と/-jək/で実現している。(23b)ではII形態素の{-lA} (複数)により、I'形態素の{kUmn}「声」、I形態素の{q-} (希求2単主)、{-At} (動詞化)、{-jkEnI} (不完了)、{-tEk} (2単主)がII形態素に交替し、表層で、/q-/、/komŋ/、/-al/、/-jkəne/、/-tək/で実現している。

23) {nm}は語頭では/təm/で現れる。

24) {-At}の{t}は後続するII形態素{-lA}の初頭の{l}に同化して/l/になる。

3.4. I' 形態素 + I 形態素

I' 形態素は、1語の中にII形態素がなく、I形態素と共起する場合には、I形態素をI'形態素に交替させる。上述の(12a)~(12i)、(13)、(14a)~(14d)はこれに該当する。以下、改めて基底から表層が導かれるプロセスを書き加える。

- (24=12) a. {nAlɣ}+{-tʃUl}+{-∅} → {nAlɣ-tʃUl-∅} → /nalɣ-ə-tʃul/ 「毛皮の断片」(/nalɣ/ 「毛皮」, /-ə-/ 挿入, /-tʃul/ 「断片」) 【Chuk】 {nAlɣ^[VH]} → /nelɣ/
 b. {kAjɲ}+{-tʃUl}+{-In} → {kAjɲ-tʃUl-In} → /kajɲ-ə-tʃul-in/ 「熊肉の」(/kajɲ/ 「熊」, /-ə-/ 挿入, /-tʃul/ 「断片」, /-in/ 所有) 【Chuk】 {kAjɲ^[VH]} → /kejɲ/
 c. {pInA}+{-jUʃ}+{-I}+{-∅} → {pInA-jUʃ-I-∅} → /pina-juʃ-i/ 「雪が降り出した」(/pina/ 「雪」, /-juʃ/ 「始まる」, /-i/ 完了) 【Chuk】 {pInA^[VH]} → /pine/
 d. {kAlI}+{-cIt}+{-lʃ}+{-mUjU} → {kAlI-cIt-lʃ-mUjU} → /kali-cit-ə-lʃ-ə-muju/ 「私達は学生だ」(/kali/ 「書く」, /-cit/ 相互, /-ə-/ 挿入, /-lʃ/ 分詞, /-ə-/ 挿入, /-muju/ 1 複主) 【Chuk】 {kAlI^[VH]} → /keli/
 e. {plAk}+{-U} → {plAk-U} → /pəlak-u/ 「ブーツ (複)」(/pəlak/ 「ブーツ」, /-u/ 絶複) 【Chuk】 {plAk^[VH]} → /plek/
 f. {Ajma}+{-nU} → {Ajma-nU} → /ajma-nu/ 「リーダーとして」(/ajma/ 「リーダー」, /-nu/ 様態格) 【Chuk】 {ArAm^[VH]} → /erem/
 g. {AjAt}+{-I}+{-∅} → {AjAt-I-∅} → /ajat-i/ 「彼／彼女は倒れた」(/ajat/ 「倒れる」, /-i/ 完了) 【Chuk】 {ArAt^[VH]} → /eret/
 h. {kU}+{kAv}+{-ŋ}+{-∅} → {kU-kAv-ŋ-∅} → /ku-kav-ə-ŋ/ 「彼／彼女は慣れている／いた」(/ku...-ŋ/ 不完了, /kav/ 「慣れる」, /-ə-/ 挿入) 【Chuk】 {kAv^[VH]} → /kev/
 i. {qAj}+{kmIn}+{-jEk} → {qAj-kmIn-jEk} → /qaj-ə-kmiŋ-ə-jək/ 「子供達が」(/qaj/ 指小, /-ə-/ 挿入, /kmiŋ/ 「子供」, /-ə-/ 挿入, /-jək/ 有生・複・場所格(能格)) 【Chuk】 {qAj^[VH]} → /qej-, {kmIn^[VH]} → /kmiŋ/

- (25=13) {ɣA-}{jIcʃAmjI}+{-tA} → {ɣA-jIcʃAmjI-tA} → /ɣa-jicʃamji-ta/ 「兄弟と」(/ɣa...-ta/ 共同格, /jicʃamji/ 「兄弟」) 【Chuk】 {jIcʃAm^[VH]} → /jicʃem/

次の(26a)~(26d)は、チュクチ語の/e/に対応する{A}が含まれていないI'形態素である。(26a)は{qIt}「凍る」、(26b) (26c)は母音は{E}のみの{kElt}「結ぶ」、{IEɣ}「溶ける」、(26d)は子音形態素{np}を語幹に持つ例である。

- (26=14) a. {nA-}{kU-}{-n-}{qIt}+{-At}+{-ŋ}+{-nAw} → {nA-kU-n-qIt-At-ŋ-nAw} → /na-kun-qit-an-ŋ-ə-naw/ 「彼／彼女はそれらを凍らせている／いた」(/na-/ 反転, /ku...-ŋ/ 不完了, /n...-an/ 使役, /qit/ 「凍る」, /-ə-/ 挿入, /-naw/ 3 複目) 【Chuk】 {qIt^[VH]} → /qit/
 b. {ɣA-}{kElt}+{-lin} → {ɣA-kElt-lin} → /ɣa-kəlt-ə-lin/ 「それを結んだ」(/ɣa-/ 結果相, /kəlt/ 「結ぶ」, /-ə-/ 挿入, /-lin/ 3 単目) 【Chuk】 {kElt^[VH]} → /kəlt/
 c. {nA-}{kU-}{-n-}{IEɣ}+{-At}+{-ŋ}+{-nAw} → {nA-kU-n-IEɣ-At-ŋ-nAw} → /na-kul-ləɣ-an-ŋ-ə-naw/ 「彼らはそれらを溶かしている／いた」(/na-/ 反転, /ku...-ŋ/

- 不完了, /l...an/ 使役, /ləy/「溶ける」, /-ə-/ 挿入, /-naw/ 3 複目) 【Chuk】 {EY^[VH]}
 → /ləy/
 d. {YA-}+{np}+{-lInAw} → {yA-np-lInAw} → /ya-np-ə-linaw/「それらを置いた」(/ya-/
 結果相, /np/「置く」, /-ə-/ 挿入, /-linaw/ 3 単目) 【Chuk】 {np^[VH]} → /np/

ここで、I' 系列の子音形態素について、若干の補足をしておく。Muravyova (1980) は約 150 語の I' 系列の形態素をリストアップしている。その中に唯一、/mk/「多い」という子音のみからなる形容詞語幹が含まれているが、用例がないため、そのふるまいは確認できない²⁵⁾。

そこで、筆者のデータから /mk/「多い」の例についてみると、確かに I' 系列形態素のようにふるまうことがわかる。たとえば、(27a) (27b) では /mk/ は /i/, /u/ と共起していることから I 系列のようにも見える。しかし、(27c) では /-aw/ (他動詞化), /-naw/ (3 複主), (26d) では /-at/ (自動詞化), /-ik/ (不完了) と共起していることから、/mk/ は I 系列ではなく、I' 系列、すなわち {mk} であることがわかる。

- (27) a. /n-ə-mk-ə-qin/「多い」(/n-/ 属性, /-ə-/ 挿入, /mk/「多い」, /-ə-/ 挿入, /-qin/ 3 単主)
 b. /Situ-mk-ə-k/「雁の群れに」(/Situ/「雁」, /mk/「多い」, /-ə-/ 挿入, /-k/ 場所格)
 c. /mən-ŋ-ə-n-mk-aw²⁶⁾-naw/「私たちはそれらをたくさん集めたらなあ」(/mən-/ 1 複主, /ŋ-/ 仮定, /-ə-/ 挿入, /n...aw/ 他動詞化, /mk/「多い」, /-naw/ 3 複主)
 d. /n-ə-mk-at-ik-ə-n/「それが多くなるように」(/n-/ 希求, /-ə-/ 挿入, /mk/「多い」, /-at/ 自動詞化, /-ik/ 不完了, /-ə-/ 挿入, /-n/ 3 単主)

筆者のデータからは、この他 I' 系列と考えられる子音形態素として {tʃ}「あふれる」, {np}「置く」が確認されている(後者については、(26d) を参照)。(28) は {tʃ}「あふれる」の例である。

- (28) {YA-}+{tʃ}+{-lIn} → {yA-tʃ-lIn} → /ya-tʃ-ə-lin/「それはあふれた」(/ya-/ 結果相, /tʃ/「あふれる」, /-ə-/ 挿入, /-lin/ 3 単主)

4. おわりに

以上、本稿ではコリャーク語チャウチュヴァン方言の母音調和について、全ての形態素が基底において I, I', II の 3 系列に分かれること、異系列の形態素は表層において 1 語の中に共起できないこと、3 系列は支配力の強さにより II > I' > I という階層を成していることを指摘した。さらに、表層で /i/, /e/, /a/, /u/, /o/, /ə/ という 6 音素として実現される母音は、基底では {I}, {A}, {U}, {E} の 4 つの形態音素であることを示した。

チャウチュヴァン方言が 3 系列の母音調和であることを明確に示した点は、Muravyova (1980) に負うところが大きい。しかし、Muravyova (1980) では、母音調和が母音レベルの現象なのか形態素レベルの現象なのか必ずしも区別されていない。そのため、母音を含む形態素は個々の母音に系列を指定しているのに対し、子音のみの形態素では形態素全体に系列を

25) Muravyova (1980) は、I' 系列以外の子音形態素として /-n/ (絶対格単数), /-ŋ/ (与格) をあげ、前者は I 系列、後者は II 系列であるとしている。

26) {-e₁v} の {v} は音節末では /w/ になる。

指定するという不統一が生じている。これに対し、本稿では、母音調和を明確に形態素レベルの現象としてとらえることで、母音の表記上の煩雑さを解消し、子音形態素と母音を含む他の形態素との記述の整合性を担保した。

ところで、チャウチュヴァン方言の3系列の母音調和は、次の2点において重要な問題提起をしようとする。ひとつめは、チュクチ・カムチャツカ語族内部における母音調和の歴史的变化に関する問題についてである。これについては、Muravyova (1980)、呉人 (1999) でも整理しているように、主に次のような2つの異なる見解がある。

- [1] チュクチ・コリャーク語の母音調和の本来の状態は、チュクチ語に保持されている。一方、コリャーク語チャウチュヴァン方言の体系の独自性は二次的なものであり、コリャーク語独自の発展の産物である。
- [2] 母音調和の本来の状態は、コリャーク語チャウチュヴァン方言の体系を反映しているが、チュクチ語ではいくつかの本来の対立が消失して、体系が簡略化した。

従来は、[1] の見解が主流であった。たとえば、Stebnitskij (1937)、Skorik (1961, 1979) などでは、チャウチュヴァン方言における /a/ の不規則なふるまいは、チュクチ語やコリャーク語パラナ方言のような本来の規則的な母音調和から、母音調和が失われたアリュートル方言への移行段階を反映したものであるとする。

一方、Zhukova (1972) や Muravyova (1980) は、[2] の立場を取る。Muravyova (1980) は、チャウチュヴァン方言が Stebnitskij (1937) がいう e 方言 (パラナ方言) や a 方言 (アリュートル語) とは異質な母音体系を持つことは、むしろチュクチ語の母音体系の方がチャウチュヴァン方言から導かれたものであることを示唆するとしている。この見解を支持する研究者が現時点では少ないのは、チャウチュヴァン方言の母音調和の実態が十分に知られていないこととも関係があるかもしれない。

コリャーク語チャウチュヴァン方言・パラナ方言以外の諸方言のデータが欠落しており、新たなデータが発掘される可能性は低い。とはいえ、チュクチ・カムチャツカ語族の各言語・方言の語が収録された辞書である Zhukova & Kurebito, T. (2004)、チュクチ語の母音調和の対極にあるアリュートル語の母音調和のデータ (Kibrik et al. 2004) などを精査する作業は未だ手つかずである。まずはこのあたりから分析を進めていくことで、この問題に対するなんらかの手がかりが得られるかもしれないと考える。

ふたつめは、類型論的な問題についてである。チュクチ語やコリャーク語同様の形態素の支配性の強さによる母音調和を持つ言語として、北米のネズパース語が知られている。この言語では弱母音 {i₁, u, e}, 強母音 {i₂, o, a} があり、強母音による弱母音への一方的同化により強系列と弱系列の母音の結合が実現されるとされる (Aoki 1968)。チュクチ語やコリャーク語で /e/ の位置に現れた合流が /i/ の位置で起こるという点だけが異なる。しかし、この母音調和もあくまでも二項対立的であり、チャウチュヴァン方言にみられるような第3の系列は認められていない。3系列の母音調和は類型的にも珍しいことから、チャウチュヴァン方言は、母音調和の類型論的研究に貴重なデータを提供しうるものと期待される。

略語・略号

関係＝関係形容詞	完了＝完了相	指小＝指小辞	指大＝指大辞
主＝主語	絶＝絶対格	双＝双数	挿入＝挿入母音
属性＝属性叙述	単＝単数	目＝目的語	不完了＝不完了相
複＝複数	不定＝不定形	1＝1 人称	2＝2 人称
3＝3 人称			

参考文献

- Aoki, H. 1968. "Toward a Typology of Vowel Harmony." *International Journal of American Linguistics*, 34(2): 142–145.
- Bogoras, W. 1917. *Koryak Texts. Publications of the American Ethnological Society, Vol. V.* (F. Boas ed.). Leiden: E.J.Brill.
- . 1922. *Chukchee. Handbook of American Indian Languages. Part 2, Bureau of American Ethnology, Bulletin 40* (F. Boas ed.), 631–903, Washington D.C.: Smithsonian Institution.
- Comrie, B. 1981. *The Languages of the Soviet Union*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dunn, M. J. 1999. A Grammar of Chukchi. Australian National University: Doctoral dissertation.
- Fortescue, M. 2005. *Comparative Chukotko-Kamchatkan Dictionary. Trends in Linguistics* (Documentation 23). Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Inenlikej, P. I. 1982. *Slovar' chukotsko-russkij i russko-chukotskij*. Leningrad: Prosveshenie, Leningradskoe otdelenie.
- Kenstowicz, M. 1979. "Chukchee Vowel Harmony and Epenthesis." *The Elements: Parassession on Linguistic Units and Levels* (R. Cline, W. Hanks, and C. Hofbauer, eds.), 402–412, Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Kibrik, A. E., S. V. Kodzasov, and I.A. Muravyova. 2004. *Language and Folklore of the Alutor People* (ELPR A2-042). Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- 呉人恵 1999 「チュクチ・カムチャツカ語族の母音調和に関する一考察」『富山大学人文学部紀要』30: 49–64.
- Kurebito, M. ed. 2001. *Comparative Basic Vocabulary of the Chukchee-Kamchatkan Language Family: 1* (ELPR A2-011). Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- . ed. 2014. *Koryak Text 1*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- . ed. 2016. *Koryak Text 2*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- . ed. 2017. *Koryak Text 3*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- . ed. 2018. *Koryak Text 4*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- 松本克己 1998 「ユーラシアにおける母音調和の二つのタイプ」『言語研究』114: 1–35.
- 箕浦信勝 1989 「チュクチ語」亀井孝等編著『言語学大辞典 第2巻』, 925–932, 東京: 三省堂.
- Moll, T. A. 1960. *Korjasko-russkij slovar'*. Leningrad: Uchpedgiz.
- Muravyova, I. A. 1980. "Korjaskaja garmonija glasnyx v sravnenii s chukotskoj." *Aktual'nye voprosy strukturnoj i prikladnoj lingvistiki*, 152–165, Moskva: Izdatel'stvo moskovskogo universiteta.
- Skorik, P. Ja. 1961. *Grammatika chukotskogo jazyka I*. Moskva/Leningrad: Izdatel'stvo AN SSSR.
- . 1979. "Chukotsko-kamchatskie jazyki." *Jazyki Azii i Afriki III*, 230–263, Moskva: Nauka.
- Stebnitskij, S. N. 1937. "Osnovnye foneticheskie razlichija dialektov nymylanskogo (korjaskogo) jazyka." *Pamjati B.G.Bogoraza (1865–1936)*, 285–306, Moskva/Leningrad: Izdatel'stvo ANSSSR.
- 特古斯 1995 「チュクチ語西部方言の音韻論」『言語学研究』14: 165–197.
- Zhukova, A. N. 1972. *Grammatika korjaskogo jazyka*. Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.
- Zhukova, A. N. and T. Kurebito. 2004. *Bazovyj tematicheskij slovar' korjasko-chukotskix jazykov* (Asia and African Lexicon Series 46). Tokyo: Research Institute for Language and Culture of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.